

キュレータと作家による展覧会と作品についての言葉

展覧会について

「わたしたち（あらゆる生きもの）は同じ一つの生であり続けている」
(エマヌエーレ・コッチャ)

この衝撃的なフレーズは、『植物の生の哲学』で知られるイタリア人哲学者エマヌエーレ・コッチャの言葉だ。人類の活動が地球全体へ深刻な影響を及ぼす「人新世」において、私たちはいかに人間中心主義を乗り越えられるのか。非人間存在を思いやり、地球環境に配慮するとはいかなることか。

「メタモルフォーゼ」(métamorphosés, 変身/変態)が可能にするのは「共感」だ。あらゆる生は「メタモルフォーゼ」でつながれる。すべての私たちは異種混濁であり、過去・未来と地球上全体に拡がっている。「メタモルフォーゼ」はそれゆえ遍在であり不死である。

「伝統と革新」を象徴する野心的空間・瑞雲庵において、世代・表現領域の異なる6人の日仏アーティストが、アートをつうじてエコロジーを問う。

About Exhibition

“We (all livings) are living a single life, the same life” (E. Coccia).

This striking phrase is from the Italian philosopher Emanuele Coccia, known for his “The Life of Plants”(2016). In the “Anthropocene”, where human activities are having a serious impact on the entire planet, how can we possibly overcome anthropocentrism? What does it mean to be compassionate toward non-human beings and to care for the global environment? What “metamorphosis” makes possible is “empathy”.

All life is connected through “metamorphosis”. We are all heterogeneous and sprawled across the globe in the past and future. Metamorphosis is therefore omnipresent and immortal.

In the ambitious space of Zuiun-An, which symbolizes “tradition and innovation”, six French and Japanese artists from different generations and fields of expression will question ecology through art.

ジャン＝ルイ・ボワシエ/ Jean-Louis BOISSIER

1945年生まれ。メディアアーティスト、キュレータ、パリ第8大学名誉教授。1980年代より、CD-ROMを使用したインタラクティブ・インスタレーションを通じて、鑑賞者と場の変容の問題に着目。主著に「La Relation comme forme : L'interactivité en art, nouvelle édition augmentée」(2004), « L'Écran comme mobile » (2016)。

《Crassula ubiquiste》について

クラッスラ・オバタとして知られる多肉植物の断片は、中国、アメリカ、イギリス、日本、フランス、スイス、デンマークなど、さまざまな国のさまざまな場所から採取される。挿し木は栽培され、新しい挿し木を生むこともある。そのため、さまざまな場所にさまざまな個体が存在する。コロニーとしての寿命は不定である。植物が互いにコミュニケーションをとっている事実が知られている。しかし、遍在している植物の場合はどうだろうか。それらは、テレポーテーションや量子スケールで見られる状態のもつれに沿って、情報や経験を共有できるのだろうか。そのような調査は、収集され展示される植物によってすでに明らかにされた記憶の役割と矛盾し、増幅するのだろうか。というのも、植物が私たちに伝える記憶の力は、単純に言えば、植物が生きていることに由来するからだ。

(カタログ『Crassula ubiquiste』p.199より)

フロリアン・ガデン/ Florian GADENNE

1987年生まれ。ナント＝サン・ナゼール高等美術学校修了(修士)。マイクロ・マクロの観点を行き来しながら、人間中心主義的なエコロジーを批判し、日常を見つめる詩的な視点を提唱する。その表現は絵画、彫刻、映像など多様な形態をとる。PARIS ARTISTES 入選 (2015), Art Award In the CUBE 2023 入選 (2023) や 500m 美術館賞グランプリ賞 (2023), 第 27 回岡本太郎現代美術賞入選(2024)。

《アンブレラ種》- 山・川・森(2023)

「アンブレラ種」とは、生態学で生態系ピラミッドの頂点に立つ敵なしの捕食者を意味する。その適切な保護は、その「傘」に含まれる生態系全体の保全によってこそ実現する。山・川・森からなる三つの大画面の絵画には、イヌワシを頂点とする、作家が 2023 年より在住する岐阜県の豊かな自然における複雑なネットワークが精緻に描かれている。

《Visions lyriques》(2021-)

《Visions lyriques》(叙情的幻視)が描くのは、ありふれた光景の中に突如として顕れる奇妙なイメージである。世界を見つめる視線は、平凡な日常を超えて、愉快で感動的で驚くべきものとなりうる。フランスの詩人クリスチャン・ポバンは、詩作を〈異なるイメージを出逢わせ、結びつける行為〉と定義した。作品を貫くテーマは、新しいエコロジー思想である。生態系破壊と気候大変動への対峙が切迫した課題である今日、高度テクノロジーとグローバル資本主義に隅々まで支配された都市生活において、私たちが自然環境と築く関係性は著しく貧しく、身の回りの動植物への配慮は不十分だ。芸術の持つポエジーの力によって、世界を見る目を覆すことができるだろうか。その新たな思考は、私たちと共存するすべての他者との関係を結び直してくれるだろうか。

《Quercus - Été》(2023)

この絵は、四季折々の榎の木を描いたシリーズの一部である。夏、葉は濃い緑色を帯び、毛虫は蝶となって幾度もの命の危険に耐え、多種多様な昆虫が枝の周りを五月蠅く飛び回り、鳥たちの餌食となる。生命は躍動し、誰もが秋が来る前に子孫の将来を確かなものになりたいと考えているようだ。夏はまた、木々が干ばつと戦うべき季節でもある。干ばつは木々を弱らせ、そこに生息する生物たちとのさまざまな関係に適応する能力に影響を与える。ドングリが熟すと、鳥やリスやネズミによって、母樹からさらに遠くへ、あるいはさらに遠くへと旅立つ準備がまもなく整う。

クワクボリョウタ/Ryota KUWAKUBO

1971年生まれ。情報科学芸術大学院大学教授。電子回路を素材とした「デバイス・アート」の代表作に《ビットマン》(1998)、《PLX》(2000)、《ニコダマ》(2010)などがある。2010年《10番目の感傷(点・線・面)》で第14回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。以後、光と影による内的な体験を促すインスタレーションを制作。ソロ活動の他、パーフェクトロンとしての活動では『デザインあ展』(2018)の展示構成などを手がける。

《LOST #20》

クワクボリョウタの《LOST》は、光源を伴った小さな電車が、さまざまなオブジェを照らしながらそのなかをゆっくりと進んでいく作品である。これまでクワクボは 19 のシリーズを異なる国や町の異なる空間に出現させてきた。この瑞雲庵での展示はシリーズの 20 番目の作品であり、これまでの作品がそうであったように、瑞雲庵の二階の空間のために構想され、設置され、実現した作品だ。こうした作品は「サイトスペシフィック」な作品(場所の特性に依拠する作品)と呼ばれ、まさに展覧会会期中そこにしか存在しない。作品を経験する私たちの印象や感覚もまた、その瞬間にある。その経験は私たちを生まれたあとの繭(E.Coccia)に包み、メタモルフォーゼに誘う芸術的アプローチではないだろうか。

石橋友也/ Tomoya ISHIBASHI

1990年生まれ。早稲田大学大学院電気・情報生命専攻修了。金魚、漆、言語など自然と人為の境界に着目し、科学・テクノロジーの視点からそれらの性質、構造、歴史に迫る。第23回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞(2021)、WIRED CREATIVE HACK AWARD グランプリ(2019)、第25回岡本太郎現代芸術賞入選(2022)。個展に「コトバノキカイ」(TOKAS hongo, 東京)。

《金魚解放運動》

石橋は生物学を学び、金魚とフナの関係性に基づく実践を行う。金魚の祖先は野生のフナであり、1700年間の品種改良を通じて多種多様な品種が生み出されてきた。鑑賞と愛玩を目的にデザインされた金魚たちは、その姿形から自然環境下で生き抜く力を持たない。本作は、金魚を逆方向に品種改良し直すことによって、祖先のフナのかたちへと戻す試みであり、5年以上の歳月を費やして実行されている。この営みを通じて、生命の操作にまつわる欲望や美意識、あるいは人間と他生物の相互作用や共進化について思考する。今回の展示にあたって、プロジェクトを通じて交配に関わった全ての金魚の記録写真を元に作成した家系図を合わせて展示する。

《1700 Years》

近年流行している金魚の一種「ピンポンパール」と祖先の近縁種であるフナを、祖先のフナから今日の金魚まで高度に保存されている遺伝子配列「AB052332」の上で共演させた。

入江早耶/ Saya IRIE

1983年生まれ。広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。第6回 shiseido art egg 賞受賞(2012)。International Studio & Curatorial Program 参加(2022, ニューヨーク, ポーラ美術振興財団助成)。個展に「デイリーモニュメント」(2023, 国際芸術センター青森)、「純真遺跡〜愛のラビリンス〜」(2019, 兵庫県立美術館)など。消しゴムでイメージを消して、でた消しカスを練り上げて彫像するという独特のアプローチを追究。

《木土偶地藏ダスト》(2023-2024)

消しゴムのカスによる精巧な彫刻作品で知られる入江が大学時代に学んだのは、プロダクトデザインである。本作品の素材となるのは私たちの日々の消費生活を象徴するお菓子の箱やデパートの紙袋。私たちの欲望・望み・野心は資本主義社会において巧妙にデザインされたパッケージに集約される。入江はこうした消費行動がまさに精神活動としての側面を担っているとして、土偶・埴輪・道祖神という祈りの原始的造形に立ち戻り、それを再解釈した集合的イメージを生み出す。

《超電光石火》(2021)

捷疾鬼(しょうしつき)とは、光のように足が早く、お釈迦様が亡くなった時に遺骨(仏舎利/ぶっしゃり)をすごい速さで奪って逃げたが、それより足の早い韋駄天に防がれたという鬼の名である。その逸話を、「改心した後、光速でwifiの速度を安定化させる守護神に転生(メタモルフォーゼ)した」という現代神話としてアップデートして制作した作品。

《摩利支天ダスト》(2024)

摩利支天は日の光が神格化した神様で、開運厄除、除災得幸のご利益があるとされる。また、陽光は人々を傷つけることがなく、超越的な力をもつ存在として武士の間でも崇拜されていた。現在でも災難から人々を隠し守護する存在として建仁寺など京都の寺院各所で祀られている。掛軸に描かれた神様を現実の世界へ召喚することで、ご利益をより強化できるだろう。自然災害や戦争に人々が苦しむ今日、心の拠り所としての必要性を感じて制作を進めた。

古市牧子/ Makiko FURUICHI

1987 年生まれ. ナント＝サン・ナゼール高等美術学校修了 (修士). ナント市賞受賞(2018)。

「波、風、星」(レ・サブール・ドロヌ現代美術館個展、2024)、「開花II」(ボドゥヴァン庭園内のチャペル全体に壁画、ラ・ヴァレット＝デュ＝ヴァール、2023)、「シャガールと私!」シャガール国立美術館 50 周年企画展招待参加 (ニース、2023)、「KAKI Kukeko」(FRAC、カルクフー)、「ヒヒフイズム」(WISH LESS gallery、東京、2022)、「ブドウの時代」(AXENÉO7、カナダ、2019)など。洗練された独特な水彩画のテクニックと色彩による表現を追究。

《Le dieu et la bête》(2023)、《Sans titre》(2022)についてのいくつかの言葉

本作品群は、フランスの Pontmain にあるアートセンターにおける滞在制作を経て生まれた。人口 800 人ほどの小さな村である Pontmain にはその規模に不釣り合いな印象を与えるほど巨大な教会 (Basilique) がそびえる。村の人々は大変信心深く、日曜のミサは大変賑わう。1871 年、村の子ども 4 人が聖母の出現を目撃した話は有名だ (「ポンマンの聖母」)。古市が滞在制作したアートセンターは元はポンマンの老人施設だったという。こうした状況の全てが、生死・顕現・信仰をモチーフとする作品群へと作家を導いた。

布に描かれた模様は即興的だ。植物の葉や茎、動物や人の顔にも見える。それはまさに幻影か顕現か、私たちに捉えきれない世界の存在を垣間見せる。濡らした布にインクを垂らすと、色が四方八方へ広がっていく。それは制御できないものとの協働作業であり、古市は水彩作品や他の表現においても、こうした「思い通りにならなさ」との対話を追究してきた。

水彩画家によるメタモルフォーゼ

古市牧子の水彩画の魅力は、色彩が混じり、滲み、流れ、広がるさまの豊かさである。作家としてのキャリアの初めから水彩画のこうした独特なテクニックを追究し、極めて長けている。繊細かつ丁寧に操られているように見えるこうした水彩絵具のパフォーマンスは、作家自身の言葉によれば「自然なるものとの共同制作」であり、むしろコントロールできないことに本質がある。描かれる動植物、聖なる者ども、妖怪や悪魔らの「キャラクター」は、何かを守ろうとしているようだ。自らが築いてきたものを死守し、変化を拒むことは、メタモルフォーゼを本質とする世界に抗うことである。

【キュレーター】大久保美紀/ Miki OKUBO

1984 年生まれ. 情報科学芸術大学院大学准教授. 芸術博士(Doctorat en Esthétique, Science et Technologie des Arts, パリ第 8 大学). 専門は美学・芸術学. 共感論・新しいエコロジーの美学を研究。2017 年よりキュレーターとして医療とエコロジーの領域における芸術的感化を模索する展覧会を多数企画. 主著は « Exposition de soi à l'époque mobile/liquide » (2017).

Website : <http://artsensibilisation.wordpress.com>

